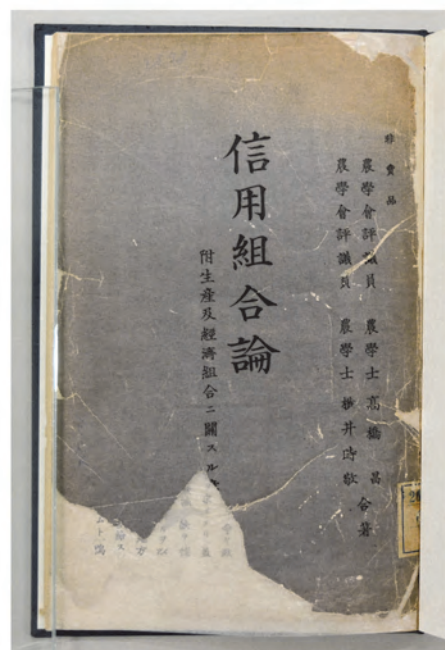




事 參 故
明常句酒士博學農



員 議 商 前
朔 部 渡 士 學 農



中：渡部朔、左：酒勾常明『東京農業大学 開校十五年記念帖』（*）
右：『信用組合論：附生産及經濟組合ニ關スル意見』高橋昌、横井時敬合著（*）

東京農業大学の人々（二一） — 産業組合誕生の功労者・渡部朔 —

本学初代学長・横井時敬には、駒場農学校時代の同級生であった高橋昌との共著『信用組合論 附生産及經濟組合ニ關スル意見』（本学大学史資料室および貴重書室所蔵）がある。明治二四年（一八九一）一二月に刊行された。同書は、『協同組合の名著』第一卷（家の光協会、一九七〇）や『明治大正農政經濟名著集』第四卷（農山漁村文化協会、一九七七）にも収録されていることからわかるように、わが国の産業組合史・協同組合史を語る上で不可欠な文献である。ちなみに、産業組合とは現在の農業協同組合や生活協同組合などの前身に当たる。

横井時敬と高橋昌の共著とされる『信用組合論』は、このように歴史上、重要な文献であるにもかかわらず、その本当の著者は、実は横井でも高橋でもない。実際の著者は、いずれも横井・高橋の駒場農学校時代における同級生渡部朔と酒勾常明であった。渡部・酒勾の共著が横井・高橋の共著として刊行されることになった経緯等について、詳しくは拙稿（二〇〇六）「渡部朔と明治二四年の信用組合論」『協同組合研究』第二五巻第二・三合併号（通

卷七一・七二号)を参照されたい。

いずれにせよ、今回は、『信用組合論』の本当の著者の一人である渡部朔を取り上げてみたい。まず、東京農業大学と渡部朔との関係について述べておこう。『東京農業大学五十年史』(一九四〇)をひもとくと、明治三〇年(一八九七)一月一五日のこととして、以下のように記されている。

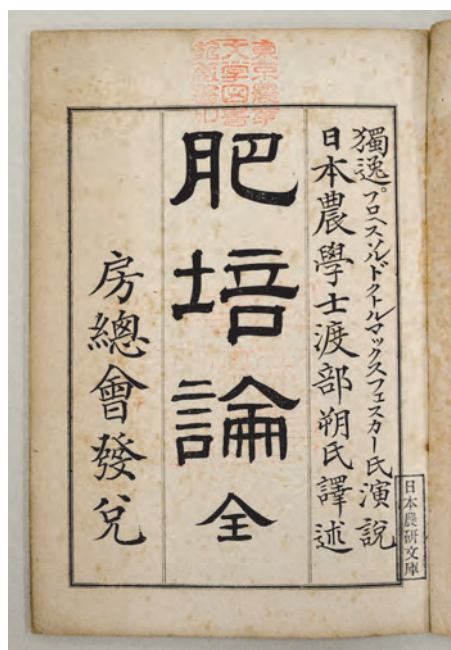
「(同日)大日本農会附属東京農学校職制の制定あり、之に依り大日本農会は、新に幹事小笠原金吾を本校幹事に、又、農芸委員横井時敬氏を本校教頭に任命し、同日、伊庭想太郎、豊永真里、岡毅、本多岩次郎、小林房次郎、渡部朔、渡瀬寅次郎、横井時敬、長岡宗好、沢野淳の十氏を、商議員に委嘱する等新体制を整えたり。」

すなわち、財政難のため維持が難しくなった東京農学校を、榎本武揚が大日本農会に経営移譲し、新たに大日本農会附属の東京農学校となった時、商議員に任じられた一〇人のうちの一人が渡部朔だったのである。その後、明治三四年(一九〇一)における大日本農会附属東京高等農学校への改称を経て、翌明治三六年(一九〇三)九月一日まで、渡部は商議員を務めた。約六年半という決して長くはな

い期間であったが、農学校再建の重要な時期を商議員として経営に携わったのである。

さて、渡部朔は、文久二年(一八六二)一月一日、幕臣であった渡部一郎(のち温と改名)の長男として牛込に生まれている。初め朔太郎と称した。父の温は、開成所教授並出役、沼津兵学校一等教授並、長崎英語学校兼長崎師範学校長、東京外国語学校長などを歴任した高名な英学者で、『英吉利会話』『地学初歩』『経済説略』『西洋蒙求』『英国史』『英文伊曾保物語』『通俗伊曾保物語』など多数の著訳書を刊行し、また『中外新聞外編』『公私雑報』などの編纂にも従事している。その後、東京府会議員、東京市会議員、牛込区議会議員なども歴任し、晩年には実業家として財をなした。

このような父のもと、渡部朔は明治二年(一八六九)に沼津兵学校附属小学校に入学、明治七年(一八七四)には東京英語学校に入学し、東京開成学校予科を経て、明治十一年(一八七八)三月に勸農局農学校(のち駒場農学校)農学科に二期生として入学した。駒場農学校では、イギリス人教師について学び、明治十三年(一八八〇)六月、横井、高橋、酒勾らとともに同校農学科を卒業した。



『肥培論』渡部朔訳(**)

駒場農学校を卒業後、同年七月、内務省勸農局雇(地質課勤務)に任ぜられ、駒場農学校の農学教師も兼任していたドイツ人農学者マックス・フェスカの指導のもと、全国の土性調査事業に従事することになった。翌明治十四年(一八八一)農商務省の新設とともに同省地質調査所御用掛、同所五等属、地質局四等技手(土性課長心得)、農商務技師試補(地質局勤務)など一貫して土性調査事業に従事した。フェスカが房総会で行った講演を『肥培論』(本学図書館所蔵)として翻訳したのもこの時代である。また、この時代は、大日本農会農芸委員、農学会の前身である研農会的主計・編輯委員、農学会の評議員・幹事会計主任なども務めている。

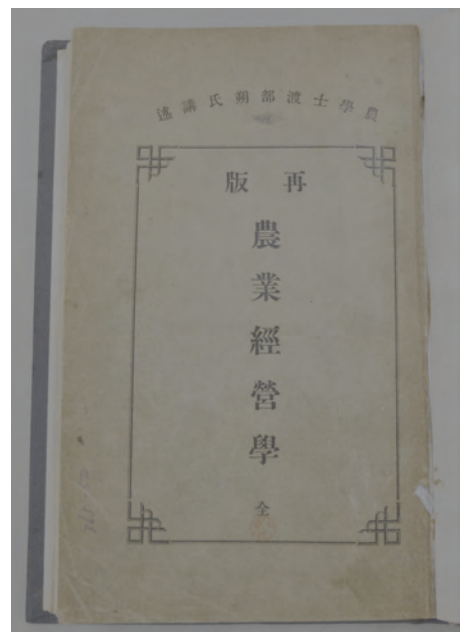


『相模全圖武藏國南部土性圖』(*)

やがて明治三二年(一八八九)一月、渡部朔はドイツ出張を命ぜられた。帰国は明治三四年(一八九二)八月である。出張の目的は「土性調査事業研究ノ為メ」であったが、帰国後の渡部がドイツの産業組合について深い知識を有していたことや、後述するようにドイツの農業経営学についても講義や著述ができるだけの学識を備えていたことからわかるように、研究は土性調査のみならず農業全般、とくにその社会経済的側面に向けられていたと考えられる。

ドイツ留学中の明治三三年(一八九〇)六月、地質調査所五等技師(奏任官五等)となり、帰国直前の明治三四年(一八九一)八月には農商務技師(地質調査所勤務)に任ぜられている。帰国後の明治三六年(一八九三)年六月、農事試験場創設にともない同場技師兼農商務技師(農務局勤務、高等官七等)となった。

明治二八年(一八九五)四月、農商務技師(農務局勤務)専任となり、翌五月には農務局農事課長を命ぜられた。これに先だつて、明治三七年(一八九四)一月、帝国大学農科大学(のちの東京帝国大学農科大学、現在の東京大学農学部)講師を嘱託され、第二講座を担当している。この時、渡部が担当した講義は「農業経営学」であり、その講義内容は教え



『農業経営学：全』渡部朔講述(**)

子たちによって出版された『農業経営学』(明治二八年「一八九五」初版、明治三三年「一九〇〇」再版)いずれも本学図書館所蔵)から看取することができる。ドイツ農業経営学の翻案的な内容ではあるが、「農業経営学」と銘打ったわが国最初の著書であることは注目してよい。

明治三一年(一八九八)四月まで続く農務局農事課長時代における最も注目すべき仕事は、産業組合法案(第一次)の立案である。明治三〇年(一八九七)の第一〇帝国議会に提出されたこの法案は、結局は審議未了のままに終わったが、ここで種々の議論を尽くしていたことがのち明治三三年(一九〇〇)に産業組合法が成立し得た要因だったのであり、

この時から初めて「産業組合」という言葉が使われるようになったこととあわせて、渡部朔の産業組合史上における大きな業績であった。なお、農事課長時代、渡部は本務以外に水産調査会幹事、貿易品陳列館商議員、農業教員養成方取調委員、各種共進会審査長などを務め、また農学会会長にも挙げられている。

明治三十一年（一八九八）四月、渡部朔は非職を命じられた。父温の病が篤くなったためであろう。父温は、同年七月に、東京製綱会社の



明治30年代、渋谷常盤松時代の校舎(*)

社長や東京瓦斯株式会社取締役を辞任、翌八月に病没した。渡部朔はその後、父温の跡を継いで、実業界に身を投じ、日本塗装株式会社取締役社長、亜細亜護謨株式会社や日本電気黒鉛株式会社の取締役、東京瓦斯株式会社・東京製鋼株式会社・東海鉛管株式会社の監査役などに就任、さらに東京府会議員、牛込区区長会議長なども務めている。なお、この実業家時代においても、明治三四年（一九〇一）に第五回内閣勸業博覧会評議員を仰せ付けられ、大正二年（一九一三）には大日本農会参事、同五年（一九一六）社団法人大日本農会理事、さらに同一五年（一九二六）には同会顧問に選出されるなど、農業界との関わりは維持されていたが、農商務省に身を置いていたならば、農政分野でさらに驥足を伸ばすことができたのではないかと惜しまれる。駒場農学校の同級生であり、かつ『信用組合論』の共著者であった酒匂常明が、その後、農商務省農政局長として明治農政の立役者となったように。

渡部朔が、六九歳を一期としてその生涯を閉じたのは、昭和五年（一九三〇）三月一日のことであった。

名誉教授 友田清彦



世田谷キャンパス サイエンスポート（令和2年竣工）

本文中で*印の付いている資料は当大学史資料室の所蔵資料です。本文中で**印の付いている資料は当大学図書館の所蔵資料です。

当資料室では東京農業大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農業大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、左記まで、一報くだされば幸いです。

東京農業大学

図書館 大学史資料室

T 156-8502

東京都世田谷区桜丘1-1-1

電話 03-5477-2526

FAX 03-5477-2546